

スコラ・ピロムーソールム

第Ⅱ部 音楽少年アイヌーシュの修行

原 正 幸

人間科学部門・人間存在研究

SCHOOL OF PHILOMUSES

Part II : The Training of Musical Boy Ainuusy

HARA Masayuki

Department of Human Sciences; Studies of Human Being

Caput III (Summa)

Candidato Ainuusy, qui tres menses in Schola ista laborabat, formaliter permittitur fieri ibi discipulus; coepit <musicae inaudibili> studere, legens Platonis TIMAEUM in linguam latinam traductum, cum modum clamandi doceatur a discipulo seniore Enysorpho ad echoem redire faciendam. Post annum, cum directore Oxecnarf de constructione in illo dialogo animae mundanae colloquto, comprehendit <harmoniam mundi> et suspicatur quaestionem: quid enim sit <revolutio animae humanae>? Cujus explicationi auxilio director commodat ei libros quinque chinense scriptos qui XIANG-WU-QIONG (i.e. Resonat ut numquam exhaustur) nominantur.

登場人物：アイヌーシュ，エニユソルフオス，
オクセクナルフ，マヤ

〈第Ⅱ部第1章と第2章のあらすじ〉

戦争で両親と兄を失って途方に暮れていた音楽好きの少年アイヌーシュは、貿易商を営んでいた父のところに入り出ていたある商人の話

を思い出し、音楽名人オクセクナルフが創設した音楽学院「スコラ・ピロムーソールム」に入学して音楽のことを勉強しようと決意する。故郷のラシュミ・ジャーラをあとにしてから何十日もかかってピロムーサ・グラーマに辿り着き、そこで出会った農夫と樵夫に道を尋ね、音楽聖人ピロムーサを祀った祠と「スコラ・ピロムーソールム」を探し当てる。(以上第1章*)

院長オクセクナルフとの面接により仮入学を許可されたアイヌーシュは、引替えに日々多くの雑役を課され、さらに発声練習の必要も指摘される。助手格のエニユソルフオスに学院の中を案内され、仕事についての説明を受けながら哲学的な対話を繰り返し広げ、音楽聖人の四守護神の一人、アグリコラ（農神）と農業の本質にまで話が及ぶ。学院の賄い婦マヤにも紹介された後、学院の二階の一室をあてがわれ、学院での生活を開始する。(以上第2章**)

*) 戦争・他者・芸術—美意識における異文化理解の可能性—, 平成14—16年度科学研究費補助金 [基盤研究(B)(1)] 研究成果報告書, 2005年3月, pp.46-55.

***) 広島大学総合科学部紀要Ⅲ第14巻, 2005年12月, pp.31-53.

III

エニユソルフォス アイヌーシュ君、オクセクナルフ先生がお呼びだよ。大分この学院の仕事にも慣れてきたようだね。水汲み場も最初の頃のように水浸しにならなくなったし、薪を割る手付きも随分よくなってきたね。

アイヌーシュ エニユソルフォスさんはお出掛けですか。

エニユソルフォス オクセクナルフ先生の用事で麓の村役場まで行ってくるんだ。

アイヌーシュ そうでしたか。でも、オクセクナルフ先生何の用だろう。また新しい仕事を言い付けられるのかな。

エニユソルフォス いや、いい話かも知れないよ。それじゃ、また。

アイヌーシュ はい、お気を付けて。

アイヌーシュ (ノック)

オクセクナルフ おーっ。入りなさい。

アイヌーシュ お呼びだそうですが。

オクセクナルフ うむ。掛け給え。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ 君がこの学院にやって来たのはいつだったかね。

アイヌーシュ 丁度去年の冬至の日でした。ですから、もう四ヶ月目になります。

オクセクナルフ それ位になるね。君も大分この学院の生活に慣れてきたようだし、エニユソルフォス君やマーヤの話によると、学院の仕事も手抜きせずしっかりこなしているという。この学院では最初の三ヶ月が見習い期間ということになっている。従って、君は「入門テストに合格」ということだ。今日からは、学院の仕事に加えて勉強の方も始めることにしよう。

アイヌーシュ は、はい。ありがとうございます。

オクセクナルフ 君はラテン語はどこで勉強

したかね。

アイヌーシュ 小さい頃文法の初歩を父親に手ほどきしてもらいました。最初のうちは易しいラテン語の話を教えてもらって、あとは父親の書架に沢山あった対訳本を読んで独学しました。

オクセクナルフ ギリシア語は。

アイヌーシュ 習ったことはありません。

オクセクナルフ うむ。じゃ、中国語は。

アイヌーシュ 母方の祖母が中国語を話せました。祖母が中国語を話すと音楽を聴いているようでとても面白く感じ、ものごころがついてからしょっちゅう遊びに行っては中国語を教えて貰いました。そのわりには会話は余り得意ではありませんが。でも、本を読むのは好きです。

オクセクナルフ それなら、なおさら好都合だ。ここに古代ギリシアの哲学者が書いた宇宙論のラテン語訳がある。これは全く奇怪な宇宙論と言う他ない、特に現代人の我々にとっては。だが、「聞こえない音楽」*musica inaudibilis* について学習するには恰好の入門書とでも言うべき本だ。宇宙の生成から人間の誕生に到るまでを論じた大部な著作だが、最初から全部読む必要はないだろう。勿論、全部読めばそれなりに得られるものはあるから、「聞こえない音楽」についての学習が進んだら通読してみるのもよいかも知れない。今の段階では、「生きものとしての宇宙」の魂がどのようにして造られたか、を述べた箇所が特に重要だ。だから、来年の春分過ぎまでに、この本の28頁の直前の、段落が変わるところから終わりまで一応読んで上で、特に「生きものとしての宇宙」の魂の構成に関する箇所を重点的に熟読しておきなさい。

アイヌーシュ 「生きものとしての宇宙」なんて、何を意味するのか見当も付きません。そもそも「宇宙に魂がある」なんて…。

オクセクナルフ わっはっはっはっは。無理もない。難解だと思うけれど、早速今日からこの宇宙論に齧り付いて格闘してごらん。

アイヌーシュ …分かりました。28頁のすぐ

前からですね。

オクセクナルフ そうだ。それから、発声練習の方はどうかね。毎日しているかい。

アイヌーシュ あのう、それが……。毎日毎日忙しくて余り練習していません。

オクセクナルフ この間の「山びこ祭り」の時君も発声の重要さを身に滲みて感じたようだから、発声練習の方も怠らないように。一度エニユソルフオス君に手ほどきしてもらおうといいね。

アイヌーシュ はい。そうします。

オクセクナルフ あと他に何かわしに聞いておきたいことはないかな。

アイヌーシュ この本は自分の部屋に持って行ってもよいのですか。

オクセクナルフ 勿論だとも。今日からは図書室にある本は自由に使ってよろしい。ラテン語の辞書も1冊借り出して自習用にするといい。それじゃ、戻って仕事を続けなさい。

アイヌーシュ はい、有難うございます。では、この本お借ります。

アイヌーシュ エニユソルフオスさん、お帰りなさい。

エニユソルフオス ああ。オクセクナルフ先生のところには行ったかい。

アイヌーシュ はい、この学院に来てから三ヶ月経ったので正式に「入門許可」とのことで、今日からは古代ギリシアの哲学者が書いた宇宙論のラテン語訳を読みながら「聞こえない音楽」について勉強をはじめると言われました。

エニユソルフオス そら、言った通りだろう。よかったじゃないか。これからが大変だけどね。

アイヌーシュ その宇宙論は途轍もなく難解な著作らしく、この宇宙が「生きもの」だとか、「宇宙に魂がある」とか、これまで一度も聞いたことがない宇宙論のようです。

エニユソルフオス わっはっはっはっは。確かに、難解極まる宇宙論だね。僕もこの学院に正式に入学を許可されて最初に読まされたよ。随分悪戦苦闘したな。なにしろあの宇宙論はオクセクナルフ先生のお気に入りの音楽論の一つなんだ。

アイヌーシュ ふーん。

エニユソルフオス そんなに困惑したような顔をしなくてもいいじゃないか。君もせいぜい悪戦苦闘することだね。わっはっはっはっは。

アイヌーシュ あのーっ、もう一つオクセクナルフ先生から言われたんですが…。エニユソルフオスさんに一度発声練習の手ほどきをしてもらえって。今度時間がある時にお願ひできませんか。

エニユソルフオス そう、そう、それだ。思い出した。僕も以前から何度かオクセクナルフ先生から言われていたんだ。丁度いいや。「パンタ・ガル・カイローイ・カラ（なにごともし時詣にかなうこそよけれ）」。これから一緒に行って練習しよう。滝の向い側にある岩場はもう分かるね。オクセクナルフ先生に役場の用件を報告してから僕も行くから、君は先に出掛けて岩場で待っていてくれないか。すぐ済むから。

アイヌーシュ はい、分かりました。無理を言ってますみません。

エニユソルフオス やあ、お待たせ。日が山陰に隠れるまでにまだ大分時間があるね。あーあ。ここはいつ来ても本当によい気が通っているな。

アイヌーシュ そんなこと、どうして分かるんですか。確かに、日当たりもよくて眺めのよい場所だけど。

エニユソルフオス それに滝の音も。下にいて滝のすぐ傍で聞くのと響きが違うだろう。

アイヌーシュ 少し濾過されたというか、薄いヴェールを被せたというか、そんな感じです。

エニユソルフオス うん、そういうことにな

るかな。ここでは「陰」と「陽」の気が実に調和のとれた仕方を通い合っている。きっと古代の人たちは、あの滝とこの岩場を「神」として崇めたに違いない。

アイヌーシュ 滝や岩場が御神体だったのですか。何だか原始的ですね。

エニユソルフォス 「原始的」か。まあ、いいだろう。君もそのうちに「原始的なもの」のうちに大切なものが隠されていることに気が付くだろう。さあ、発声練習を始めよう。あの滝に向かって「おーっ」と叫んでごらん。

アイヌーシュ 「おーっ」。

エニユソルフォス 駄目、駄目、そんなのじゃ。腹筋を使ってお腹をへこませながら、肺の中の空気を全部出し切ってしまう積りで声を出すんだ。

アイヌーシュ 「肺の中の空気を全部出し切る」なんて。そんなこと、不可能です。

エニユソルフォス アイヌーシュ君、君は理屈をこねすぎるよ。あくまでも、「そういう積りで」という意味さ。もう一度。

アイヌーシュ 「おーっ」。

エニユソルフォス そう、そう。そんな具合にお腹をへこませていくんだ。

アイヌーシュ こんなに長く息を出し切ると、頭がクラクラしてきます。

エニユソルフォス うわっはっはっは。力み過ぎだからだよ。腹筋さえしっかりしていれば、そんなに力まなくても声は出るよ。まあ、最初のうちは仕方ないけど。よし、もう一度。

アイヌーシュ 「おーっ」。

エニユソルフォス ほんのちょっぴりだけど、ましになってきたじゃないか。それからね、落下している滝の水に向かって叫んでいては駄目なんだ。水の音に掻き消されてしまって、山びこは帰って来ないよ。滝の右側でも左側でもいい。岩肌が凹みを帯びている辺りに向かって叫ぶんだ。岩肌が突き出ているようなところではいけないのだ。

アイヌーシュ ふーん。そんなコツがあった

のですか。僕はいつも流れ落ちる水に向かって叫んでいました。

エニユソルフォス わっはっはっは。流れる水が声を撥ね返すかどうか、岩肌の出っ張っているところに声が集まるか、凹んでいるところに集まるか、これは難しい問題ではないだろう。何事も自分で工夫してみることが大事だよ。試行錯誤というのは別に悪くはないんだ。もう一度。

アイヌーシュ 「おーっ」。

エニユソルフォス そう、その調子。

アイヌーシュ エニユソルフォスさん、今度はお手本を示してもらえませんか。

エニユソルフォス よし、いいよ。「おーっ
ーっーっ」。

アイヌーシュ すごい。とても息が長く…。あっ、山びこが帰ってくる。一回。二回。三回…。

エニユソルフォス 山びこ三回位が僕の実力といったところかな。

アイヌーシュ 本当にすごい。大したものですね。

エニユソルフォス 山びこ三回位大したことはないさ。もっと何回も山びこを起こせる人はいくらでもいるから。

アイヌーシュ でも、エニユソルフォスさんはそんなに大きな声を出してはいないのに、どうして山びこが起せるんだろう…。

エニユソルフォス あと、そうだね。自分だけ頑張って叫んでいても駄目なんだ。

アイヌーシュ といいますと。

エニユソルフォス 自分が岩壁になった積りで、つまりどんな響きの声が聞こえてきたら岩壁が応えたくなるかという意味で、岩壁の気持になって声を出すといいよ。

アイヌーシュ そんなこと不可能じゃありませんか。第一、岩は生きものではないし、生きていないものにころがあって何か感じるなんてとても考えられません。

エニユソルフォス 常識的に考えればそうだ

けれど、面接の時にオクセクナルフ先生から言われたことを覚えていないかい。古代ギリシアの音楽名人オルフェウスが豎琴を奏でながら歌をうたうと、荒れ狂っている海を鎮め岩をも感動させた、というあの故事を。

アイヌーシュ ギリシア神話に出てくるその話なら、以前から知っていました。

エニユソルフオス 君が学院にやって来た最初の日に言ったことだけど、ここは聴覚的には極楽のような世界なんだ。まだまだ時間が掛るだろうけど、そのうちに鳥たちの話が分かるようになるだろう。「話」とは言っても人間が言葉を使ってするような話ではないけれど。人間ばかりでなく、人間以外の動物や鳥たち、樹木や草たちにもところがあって、仲間同志で、あるいは風や水の流れと話をしているんだ。

アイヌーシュ そう言えば、あの日学院に来る途中で道を教えてもらった樵夫のおじさんが「俺には木たちの気持が分かる。木たちの喋っていることがわかる」と言っていたのを思い出しました。

エニユソルフオス だから、すべての生きものばかりか、風や水の流れや岩壁にもそころはあるのだ。いや、生きものでも自然的存在者でもない人間の作った物や道具にも、僕たちの住んでいるあの学院の建物にもそころがあると言わなければならない。このことは科学によっては証明できないけどね。科学では証明できないからといって、そういうことはあり得ないということには決してならない。君はさっき「原始的」と言ったけれど、古代の人たちの方がいろんなものごとを感じ取る力をもっていたんだ。それに比べると僕たち現代人は、言葉だとか機械だとか科学的説明に頼り過ぎてそういう力をなくしてしまっている。それなのに、普通はそのことに気が付いていない。

アイヌーシュ そう、そう。もう一つ思い出しました。最初の日エニユソルフオスさんが学院の内部を案内してくれた時に、水汲み場のところで「こぼれてしまって役に立たなかった水

を水琴窟で響かせて慰める」という話を聞いて僕も大変素晴らしいことだと感激しました。

エニユソルフオス そうだったね。

アイヌーシュ すると、僕も努力に努力を積み重ねて行けば、いつかは岩の気持が分かって山びこを起せるようになるかも知れない、ただ美しい声で囀っているようにしか聞こえない小鳥たちの話が分かるようになるかも知れないということですね。

エニユソルフオス まさしくその通り。君は心が素直でもの分りがいいから、その調子で「聞こえない音楽」についての勉強も進めて行くといいよ。

アイヌーシュ はい。エニユソルフオスさん、大事なことを教えて下さって有難う。

エニユソルフオス 礼なんか言わなくてもいいさ。本当のことを言ったまだから。もう大分太陽が傾いてきた。今日はこれで発声練習を切り上げて学院に戻ろう。

アイヌーシュ はい、そうしましょう。

アイヌーシュ (ノック)

オクセクナルフ おーっ、入りなさい。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ かけなさい。どうかな。一年前に君に宿題として出しておいた宇宙論の、「生きものとしての宇宙」の魂の構成に関する箇所は理解できたかな。

アイヌーシュ 正直に言って大変難しかったです。毎晩遅くまで辞書をひきながら少しずつ読み進み、何度も何度も繰り返し考えアウトラインだけは何とかつめた積りです。

オクセクナルフ よろしい。では、始めよう。かの哲学者の宇宙論ではこの宇宙はもともとあったことになっているか。

アイヌーシュ いいえ。「製作者」と呼ばれる存在がある時特定の材料から「生きもの」としてのこの宇宙を造ったとされています。

オクセクナルフ その「製作者」はギリシャ

語では「デーミウールゴス」*dēmiūrgos*と呼ばれ、また「テオス」*theos* (神), 「パテール」*patēr* (父), 「ヌース」*nūs* (理性)とも呼ばれる。1年前に君にこの宇宙論を読むように言った時、きみは宇宙が「生きもの」だとか「宇宙に魂がある」とか、そんなことはとても理解できない、とぼやいていたが…。

アイヌーシュ 確かにそう感じました。しかし、読んでみると、宇宙創造の第二段階で人間が造られた時、人間の魂と身体のそれぞれが宇宙の魂と身体と同じ材料から、同じ仕方で造られたとされています。我々人間が魂と身体からなっている、現代流に言えば人間には〈こころ〉と〈からだ〉がある、ということなら十分納得できます。ですから、この宇宙論では、宇宙と人間の間にある種の類似関係を設定するために、敢えて宇宙をも「生きもの」として捉え、人間と同じように「魂と身体を持つもの」と規定したのでは、と思いました。

オクセクナルフ なかなかよろしい。君は重要な点によくぞ気が付いた。それで、まず「生きものとしての宇宙」の魂と身体はそれぞれどのようにして造られたのかね。

アイヌーシュ 先に魂が造られてその後身体が造られたのですが、話の順序としては逆になっているので、まず身体についての話から始めます。製作者は「生きものとしての宇宙」の身体を、存在する限りの物質的なもの、つまり「地」、「水」、「火」、「風」の四元素をすべて取り込んで、それらの四元素を類比*analogiā*によって結合させて球状に作り上げました。

オクセクナルフ 「類比」というのはいわゆる「連比」($\langle a : b \rangle = \langle b : c \rangle = \langle c : d \rangle = \dots$) のことだね。

アイヌーシュ そうです。つまり〈地：水〉 = 〈水：火〉 = 〈火：風〉 = 〈風：地〉を意味します。

オクセクナルフ 「生きものとしての宇宙」の身体は何故球状に作り上げられたのかね。

アイヌーシュ 当時「球」はすべての立体の

うちで最も完全であり、他のすべての立体を自己自身のうちに含み得ると考えられていたからです。

オクセクナルフ 「製作者」が「生きものとしての宇宙」の身体を造った際に、四元素を全部使い尽くして身体の外に物質的なものを残さなかったのは何故かね。

アイヌーシュ それは、もし「生きものとしての宇宙」の身体の外に何か物質的なものが残されていると、我々人間の身体と同じようなことが必要になるからです。つまり、身体の外に何か物質的なものがあつたなら、それを見たり触れたりするために感覚器官が必要になります。あるいはそれを手に取って口に入れたりするために手や口が必要になりますし、その近くまで場所を移動するために足も必要になります。従って、このような煩しさを避け、少しも他の物質的なものに依存することのないという意味での、いわば自己完結性を「生きものとしての宇宙」に与えるために、身体の外に何も物質的なものを残さなかったのです。

オクセクナルフ その通り。だが、そうなる「生きものとしての宇宙」は生命を維持するための栄養をどこから得るのだろうか。我々人間は口から水や食物を取り入れ、消化・吸収・排泄を行なっているが。

アイヌーシュ 身体の外には何もないのですから、外部から栄養を摂取することはできません。ですから、この宇宙の内部の局所局所で起こる事物の生成・消滅を生命の維持のための糧とするという、いわば「自己栄養」のシステムになっています

オクセクナルフ よろしい。では、「生きものとしての宇宙」の魂の方はどのようにして作られたのか。

アイヌーシュ 身体の方は巨大なドッジボールのような宇宙を思い浮かべればよいのですが、魂の方は全く難解で具体的なイメージを持つことができません。というのも、「製作者」は「存在」、「同」、「異」という三種類のアイデア

(この「アイデア」なるものが何なのかさっぱり見当も付きません)を一旦混ぜ合わせた上、三段階の操作を経て一定の比率で分割し、こうして作られた魂を球状の身体にくまなく浸透させました。つまり魂は身体の特定の部位(人間ならば、脳、心臓、あるいは横隔膜等)に定位されたのではなく、宇宙の身体のどの部分をとってみても魂が浸透している、という仕方で球状の身体に染み込まれたとされています。

オクセクナルフ 確かに、初めて話を聞く者にとっては、「アイデア」なるものは捉えどころのない、始末に負えない代物に思えることだろう。君は今回指定した箇所の最初の部分で存在者の二分類がなされているのを読んだだろう。

アイヌーシュ はい。「真の意味で存在し常に同じあり方をするもの」と「生成・消滅するもの」との二分類ですね。

オクセクナルフ その通り。この分類に従えば、「生きものとしての宇宙」の身体の方は「生成・消滅するもの」に属する。現に、四元素という物質的なものから作られ、この宇宙が将来「製作者」の意図に反するようなあり方をするようになった場合には解体される、つまり消滅すべく運命付けられているからだ。これに対して宇宙の魂に関しては、少なくともその材料としての三種類のアイデア(「存在」、「同」、「異」)は「真の意味で存在し常に同じあり方をするもの」に属し、生成消滅しない。但し、これらの三種類のアイデアから構成された宇宙の魂もまた「真の意味で存在し常に同じあり方をするもの」に属すると言えるかどうか、に関しては問題がある。何故なら、宇宙の魂は身体にくまなく浸透させられたが故に、「アイデア界」と「感覚界」という二世界説の観点から考えた時、「アイデア界」に属するとは言えないからである。さらに、一般の「靈魂不滅」説によれば死後身体は消滅しても魂は消滅しないで残るとされるが、「生きものとしての宇宙」は将来「製作者」の意図したようなあり方をしなくなって解体された時、同時に魂も解体されてしまうのか、ある

いは魂は解体されないで残るのか、は不明である。だが、そんな問題は我々にとっては重要ではないから、もうこれ以上立ち入らないことにしよう。むしろ、この問題よりも魂の材料に何故それらの三種類のアイデアが用いられているのか、が重要だ。「存在」のアイデアなるものは難解だが、「生きものとしての宇宙」の存在根拠となるものだ。「同」と「異」のアイデアが何故用いられたのかは、これからの議論で君にも容易に理解できるだろう。それで、「製作者」は三種類のアイデアの混合物をどのような比率で分割したのか。

アイヌーシュ 「製作者」は三種類のアイデアの混合物から、まず「1」の部分を取り出し、以下その2倍、3倍、4倍、9倍、8倍、27倍の部分を取り出しました。従って、「1、2、3、4、9、8、27」の7つの数比が設定されたこととなります。そしてこれらの数比には実は、「1-2-4-8」という「2倍」の系列と、「1-3-9-27」という「3倍」の系列とが含まれています。これが分割の第一段階です。

オクセクナルフ よろしい。何故7つの数比が設定されたのか分かるかね。

アイヌーシュ 太陽と月をも含めて当時知られていた7つの惑星の運行軌道と対応させるためです。既に古代ギリシアには地球は太陽の周りを廻っているとする「地動説」もありましたが、一般的には、ドッジボールのようなまん丸の宇宙があつてその中心に地球が位置を占め、その周囲を太陽と月をも含めた7つの惑星が回転していて、一番外側は恒星が貼り付いたようになっている恒星天があり、巨大な「天球」全体が一年で1回転すると考えられていました。

オクセクナルフ 現代人の我々から見ればまことに奇妙な宇宙観だがね。中心としての地球からみて太陽までのいわゆる「内惑星」に関しては問題ない。だが、「外惑星」に関しては運行軌道の逆転が起る。「惑星」はラテン語では何と言われるかね。

アイヌーシュ 「プラネータ」 planetaです。

オクセクナルフ よろしい。これはギリシア語の動詞「プラナオマイ *planaomai* (私はさまよう)」から派生した名詞で「さまようもの」*planētēs*を意味する。地球からみて太陽より外側の軌道を回転する「外惑星」(火星, 木星, 土星)の場合は一時的に運行軌道が逆転(☾)し、恰もフラフラさまよっているかのように見えるところからこの名前が付いたのだ。確かに、7つの数比と7つの惑星が対応させられている。だが、それらの数比は実際の運行周期と対応するものではなく、思弁的に対応させられたものに過ぎない。それで、そのあと「製作者」はどのようにして魂の分割を続けたかね。

アイヌーシュ 「2倍」の系列(1-2-4-8)と「3倍」の系列(1-3-9-27)とではそれぞれ3つの隔りがありますが、それらの隔りのすべてにおいて2つの中項を求めました。一方の中項はいわゆる「算術中項」($n = \frac{a+b}{2}$)のようですが、もう一方の中項が何を意味するのかよく理解できませんでした。「一方の項を超過している丁度その部分だけもう一方の項によって超過されている」とはどうことなのか。

オクセクナルフ それはね、いわゆる「調和中項」($n = \frac{2ab}{a+b}$)のことなんだよ。例えば、「2倍」の系列の「1-2」の隔りでは「調和中項」は絶対値で表せば「 $\frac{4}{3}$ 」となるが、これは一方の項「1」を「 $\frac{1}{3}$ 」だけ超過していると同時に、もう一方の項「2」によってその「 $\frac{1}{3}$ 」だけ、つまり「 $\frac{2}{3}$ 」だけ超過されていることになる。

アイヌーシュ なーるほど、そういう意味だったのですか。やっと理解できました。

オクセクナルフ ここまでが魂の分割の第二段階に当たる。それで「製作者」は最後にどのようにしたかな。

アイヌーシュ 第二段階の分割によって〈3:2〉, 〈4:3〉, 〈9:8〉の隔りが生じたので、すべての〈4:3〉の隔りを〈9:8〉の隔りでもって満たした結果、〈256:243〉の余りが生

じました。

オクセクナルフ それはどういうことか理解できたかね。

アイヌーシュ 〈3:2〉の隔りと言えば音程では「完全5度」に相当し、〈4:3〉の隔りは「完全4度」に相当します。ですから、〈3:2〉の隔りと〈4:3〉の隔りの差としての〈9:8〉は、「完全5度」と「完全4度」の差としての「全音」ということになります。「すべての〈4:3〉の隔りを〈9:8〉の隔りでもって満たす」ということは、「完全4度」の内部に「全音」2つ分を埋めてやるということで、「半音」に相当するものが残ります。これが「 $n = \frac{4}{3} \div (\frac{9}{8})^2$ 」となり、比で表すと〈256:243〉になります。してみると、「生きものとしての宇宙」の「魂の分割」と言いながら実質的には音階の構成になっているのが分かります。

オクセクナルフ なかなかよろしい。「魂の分割」が実は音階の構成になっているということが分かればしめたものだ。

アイヌーシュ 最後の第三段階の話はよく理解できますが、第一段階と第二段階の分割がどうもぴんときません。

オクセクナルフ よろしい。部屋の隅に置いてある五線譜の黒板、埃を払ってからこちらに移動させてくれないか。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ どうもありがとう。五線譜を使うなんて随分久しぶりだな。何年振りだろう。五線譜なんてものは考えようによっては実に窮屈なものだが、この場合には役に立つので一つお世話になることにしよう。で、まず7つの数比についてだが、これには二通りの解釈の可能性がある。つまり、弦あるいは管の長さの比ととるか、振動数の比ととるかによって逆の関係になる。仮に弦の長さの比ととると、数が大きくなると音高はどうなるかな。

アイヌーシュ 数が大きくなればなる程音高は低くなります。

オクセクナルフ そうだね。振動数の比とす

ると。

アイヌーシュ 数が大きくなればなる程反対に音は高くなります。

オクセクナルフ よろしい。音の高低は逆の関係になるが、絶対値としては変わらない。いまここでは振動数の比と看做すことにしよう。音程比は相対的なものなので「1」に当たる音をどこにとってもよいのだが、変化記号を使わずに済むよう便宜上へ音記号の下線2本付きの「ut」を「1」として、「2倍」の系列と「3倍」の系列とに分けて当て嵌めてみよう（譜例1）。「2」はどの音になるかね。

アイヌーシュ 〈2：1〉ですからオクターヴ上の音になります。

オクセクナルフ その通り。「4」と「8」は。

アイヌーシュ 「4」は「2」の1オクターヴ上、「8」はさらに1オクターヴ上の音になります。

オクセクナルフ よろしい。次々に音は高くなって行くが、出て来る音は。

アイヌーシュ 同じ「ut」です。

オクセクナルフ じゃ、こんどは「3倍」の系列を表してみよう。「1」を同じ音とすると「3」は。

アイヌーシュ 「2」の「ut」から〈3：2〉、つまり5度上の「sol」になります。

オクセクナルフ よろしい。「9」と「27」は。

アイヌーシュ 「9」は「8」の「ut」と〈9：8〉、つまり「全音」上の「re」になり、「27」はこの「re」から「オクターヴ+5度」上の、付線が5本付いた「la」になります。

オクセクナルフ すると、「2倍」の系列では常に同じ「ut」が現れて来るのに対して、「3倍」の系列では次々と異なる音が現れて来る、ということは分かったね。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ これが魂の材料としての三種類のアイデアのうちに「同」と「異」が含まれ

ている主要な理由なのだ。まだ外にも理由はあるが、いまはこれらの音程との関係が分かればよろしい。第一段階で取り出された数比に相当する音は「○」で書いておいたから、今度は第二段階でそれぞれの系列の隔りで求められる中項を「●」で書き表わしてごらん。

アイヌーシュ 「2倍」の系列では「1-2」の隔りの「算術中項」は「 $\frac{3}{2}$ 」でへ音記号の一番下の線の「sol」,「調和中項」は「 $\frac{4}{3}$ 」でそのすぐ下の「fa」の音になります。「2-4」,「4-8」の隔りではそれぞれ、この2つの求められた音の1オクターヴ上,2オクターヴ上の音が2つの中項ということになります（譜例2）。

オクセクナルフ なかなかいいね。「3倍」の系列では。

アイヌーシュ 「1-3」の隔りの「算術中項」は「2」で「1」のオクターヴ上の「ut」,「調和中項」は「 $\frac{6}{4}$ 」即ち「 $\frac{3}{2}$ 」で「1」の5度上の「sol」の音になります。すると、「3-9」と「9-27」の隔りでは、「3」の「sol」,「9」の「re」からそれぞれオクターヴ上の音と、さらに5度上の音が2つの中項ということになります（譜例3）。

オクセクナルフ すべての隔りについて一々計算する子もいるんだが、君のやり方はとてもいいよ。頭の回転が速いのかもしれない。

アイヌーシュ そ、そんなことはありません。亡くなった兄にいつも「お前は頭のめぐりが遅い」と言われていました。

オクセクナルフ そうかい。じゃ、今度は「2倍」の系列と「3倍」の系列を見比べてごらん。

アイヌーシュ 重複している音がいくつありますか。

オクセクナルフ だから、「2倍」の系列と「3倍」の系列を合併させたものを上の2つの段の五線譜を使って書き出しなさい。

アイヌーシュ はい。……………こんな具合になりました（譜例4）。

オクセクナルフ よろしい。これからが第三

段階なのだが、いま君が書き出してくれた音列中のすべての〈4 : 3〉の隔り、即ち4度音程のあるところに鉤括弧で印を付けなさい。

アイヌーシュ はい、4度、4度……。 「1」から「8」までは規則的に「fa」と「sol」の間に全音を挟んで1オクターヴの中に2つの4度があります。あと上の方に跳んで「 $\frac{27}{2}$ 」と「18」の間にも4度があります（譜例5）。

オクセクナルフ うむ。もう一つないかね。「2倍」の系列の4度と重複しているのだが、「 $\frac{9}{2}$ 」と「6」の隔りは。

アイヌーシュ 4度です。

オクセクナルフ よろしい。以上が第二段階の分割によって生じた〈4 : 3〉の隔りだ。君が指摘した「1」から「8」までの規則的な連続は、古代ギリシアの音階理論では「テトラコルド」の「ディアゼウクシス」(diazeuxis「分離」、ラテン語ではdisjunctio)と「シュナペー」(synaphē「接合」、ラテン語ではconjunctio)による音階構成と呼ばれたものだ。「テトラコルド」tetrachordonとはギリシア語で本来「4弦の」という意味だが、音階理論では「音階を構成する最も基本的な枠組みとしての完全4度」を意味する。その「テトラコルド」が間に「全音」を挟んで積み重なるのが「分離」、真ん中の音を共通音として積み重なるのが「接合」という訳だ。尤も、古代ギリシアの音階理論では、実用的見地から音域は最大2オクターヴまで、「テトラコルド」の「接合」は3つまでに限られるがね。

アイヌーシュ 何だか難しそうですね。

オクセクナルフ そんなことはないさ。第二段階の分割は、君が正しく答えた通り、すべての4度を全音2つで満たす、言い換えれば、固定音としての「テトラコルド」の枠組みを2つの可動音によって分割することによって行われる。しかしながら、全音2つが用いられるのは確かだが、不明な点があると言わなければならない。というのも、4度を全音2つで満たした後に残る半音、いわゆる「ピュタゴラス・リン

マ」Pythagoras limmaが「テトラコルド」内部のどこに置かれたのか、が述べられていないからだ。

アイヌーシュ といいますと。

オクセクナルフ 黒板にどれかの「テトラコルド」を取り出してこの分割を書き表してごらん。

アイヌーシュ ト音記号の一番下のテトラコルド（「4」と「 $\frac{16}{3}$ 」）を例にとりますと、「ut」と「re」が「全音」（〈9 : 8〉）、も一つ「re」と「mi」が「全音」（〈9 : 8〉）、そして「mi」と「fa」が「半音」（〈256 : 243〉）です（譜例6）。

オクセクナルフ 「半音」は「テトラコルド」内部の一番上にしか置かれ得ないか。

アイヌーシュ いえ、さかさまにして一番下に置くこともできます。それから「全音」と「全音」の間に置くことも可能です。

オクセクナルフ よろしい。魂の第三段階の分割によって得られた音列では、これらの3種類の配列のうちのどれか1種類だけが用いられていたのか、それとも複数の種類が混合されて用いられていたのか、という点は一切不明だ。かの哲学者も音階理論には余り詳しくなかったせいかも知れない。

既に述べたように、「製作者」は魂を球状に作られた宇宙の身体全体に浸透させた訳だから、この宇宙にはいわば「聞こえない音楽」musica inaudibilisとしての「ハルモニア」が遍在していることになる。宇宙が造られた後、人間はどのように造られたことになっているかね。

アイヌーシュ 「生きものとしての宇宙」に似せて同じ材料から作られました。但し、人間の生成は「製作者」によって行われたのではなく神話上の神々に委託されました。まず、人間の身体の方ですが、最初は球状の宇宙に似せてまん丸に作られたのですが、固定具なしで地上に置かれた時のドッジボールのようにゴロゴロ転がってしまうので「乗り物」としての胴体が作られ、さらに手足が付けられたと述べられて

譜例 1 2倍の系列 3倍の系列 $\frac{2}{1}$ $\frac{3}{1}$

譜例 2 2倍の系列における「調和中項」と「異調中項」

譜例 3 3倍の系列における「調和中項」と「異調中項」

譜例 4 分割された2倍の系列と3倍の系列 (譜例1-譜例3)

譜例 5 譜例4における完全4度の隔たり

譜例 6 $\langle 9 \cdot 8 \rangle$ (全音) の隔りによる完全4度の分割 $(\frac{9}{8} + \frac{9}{8}) = \frac{9}{4} = \frac{6}{4} = \frac{3}{2}$

Pythagoras
leimma
limma

います。それにしても、人間の身体が最初は頭（実際には「球状」とは言い難いですが）だけだったというのも奇妙な話です。

オクセクナルフ 確かに、奇妙だ。これにはそれなりの理由があるのだがね。実は、神話学

で「首切り神話」と呼ばれている大層古い考え方と関係しているんだ。ま、それはそうとして、人間の魂の方は。

アイヌーシュ 「生きものとしての宇宙」の魂と同じ材料（3種類のアイデア）から、同じ仕

方で作られました。ただし、二番煎じというかその純度においてはやや劣るとされています。

オクセクナルフ その結果、宇宙と人間の間にはどのような関係が成立したか。

アイヌーシュ 両者の形状は最終的には違ったものになってしまいましたが、宇宙魂と人間の魂の間には「類似」*analogiā*の関係が成り立つので、人間の魂は宇宙の「ハルモニア」*ἁρμονία*, *harmonia*を知覚する能力を獲得しました。つまり、媒体としての光を通じて天体の規則正しい周期的な運行を知り、同じく媒体としての音を通じて音階が響和音程によって構成されていることを知ることができるのです。

オクセクナルフ よろしい。君は「生きものとしての宇宙」の創造と人間の生成に関する主要な論点はよく理解できたようだ。だが、この宇宙論にはいくつかの重大な欠陥が含まれていると言わなければならない。いまからその話に移ることにしよう。

アイヌーシュ はい。でも、そんな難しい話が僕にも理解できるでしょうか。

オクセクナルフ そんなに心配しなくてもいい。君にも十分理解できるような仕方で話をするから。尤も、完全に理解するには時間が掛るがね。それに、これはまた1年先の、つまり次の段階の学習のための宿題ということになるのだが、この宇宙論の難点を克服し、「聞こえない音楽」に関して新しい視点を切り開くための手助けとなる恰好の書物があるんだよ。その書物についてはもう少し先のところで話をすることにして、問題の宇宙論に含まれている重大な欠陥のことをまず議論しよう。

今日の間答を開始した時、「生きものとしての宇宙」に関して、君は「この宇宙論では宇宙と人間の間にある種の類似関係を設定するために、敢えて宇宙も人間と同じように『魂と身体を持つもの』と規定したのではないか」という意味のことを言ったね。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ それがまさしくその通り

で、そこに第一の難点があると言わなければならない。

アイヌーシュ といいますと。

オクセクナルフ 宇宙と人間のそれぞれの魂が同じ材料（3種類のアイデア）から、同じ仕方で作られたとされていることから、両者の間に類似関係の存することは容易に推測される。だが、それは単純な類似関係以上のものであると言う必要がある。何故ならば、この宇宙論においては、宇宙の魂は「生きものとしての宇宙」の魂であるのみならず、人間の魂の〈あるべき姿〉、理想の姿でもあるからだ。実際、製作者は自己自身に似せて完全なる生きものとしての宇宙を造った上で、さらにその宇宙に似せて人間を造ることを神々に委託した。結果的には、宇宙と人間の間には成立する類似関係は魂のレベルにのみ限定されることになったが、このことは言い換えれば、身体を持つがために本来の在り方を乱され易い人間の魂の、〈あるべき姿〉が宇宙に投影されているということを意味する。

しかしながら、この世界における人間の在り方を直視することなしに、人間の魂の〈あるべき姿〉を宇宙の在り方に求めるのは適切ではない。我々人間は数十年の生を送るに過ぎないのに対して、宇宙は半永久的なものと考えられているからだ。ここにはギリシア哲学的な「理性」の不死性の問題が絡んでいるのだが、この問題には触れないでおくことにしよう。それはそうとして、宇宙と人間の両者の魂の間に設定された類似関係には、考えようによっては傾聴すべき点もある。

アイヌーシュ 僕にはかなり強引な設定に思われますが…。

オクセクナルフ ところで、宇宙の「魂の回転運動」と言われているものが何を指しているか分かったかね。

アイヌーシュ 宇宙の「身体の回転運動」なら、球状の宇宙の身体、即ち天球が1年で1回転する年周運動を意味するのは分かります。ある時期に天のある方角に見えた星座は1年経つ

と丁度1年前と同じ方角に見えるからです。でも、「魂の回転運動」なるものが何を意味するのか、見当も付きません。

オクセクナルフ 球状の宇宙の内部で何か回転しているものはないか。

アイヌーシュ 「回転しているもの」と言えば、惑星があります。でも、惑星は「物的なもの」ですから「魂の回転運動」とは言えないのではないのですか。

オクセクナルフ 確かに、厳密に言えば、惑星それ自体は「物的なもの」だ。だが、惑星の運行軌道はどうかね。7つの惑星の回転軌道と運行周期は。

アイヌーシュ 7つの惑星が宇宙の中心としての地球の周囲を回転する軌道のうち、内惑星（月、金星、水星）と太陽は同心円状の軌道を持つのにに対して、外惑星に関しては既に言及されたように一時的に軌道の逆転が起ります。しかしいずれにせよ、それぞれの惑星の回転周期は一定であり、相互に規則的な回転運動をしています。

オクセクナルフ 惑星の回転軌道と運行周期そのものは「物的なもの」ではない。宇宙の魂の材料としての3種類にアイデアとは何と何と何だった。

アイヌーシュ 「存在」と「同」と「異」の3つです。

オクセクナルフ よろしい。一番身近なところから始めよう。月が地球の惑星であることは現代の天文学でも異論がない。月の満ち欠けの周期は知っているね。

アイヌーシュ 29.5日です。

オクセクナルフ うむ。月は地球から見ると「新月—上弦の半月—満月—下弦の半月—新月」の満ち欠けを繰り返しているが、この周期的な繰り返しが「同」のアイデアに対応している。地球が太陽の周りを廻る公転周期は。

アイヌーシュ 約365.25日です。

オクセクナルフ よろしい。月と太陽以外の惑星に関しても、それぞれの周期、例えば木星

なら約12年というような回転周期がある。これが「生きものとしての宇宙」の魂の回転運動のうち「同」のアイデアに対応する要素だ。

アイヌーシュ では、「異」のアイデアに対応する要素は何ですか。

オクセクナルフ それぞれの惑星は一定の運行周期を保ちながらも、各周期の中では地球に対する関係を変化させている。例えば既に言及した月の満ち欠けがそうだし、太陽の日照時間の変化（これは現代では地軸の傾きの変化によって惹き起されることが知られているが）と、それに伴う地球上の中緯度地帯における四季の移り変わり、外惑星の軌道の逆転、惑星相互間の位置関係の変化、これらが「異」のアイデアに対応する要素だ。

アイヌーシュ もっと単純に内惑星の回転運動が「同」のアイデアに、外惑星の回転運動が「異」のアイデアに対応していると考えすることはできないのですか。

オクセクナルフ うむ。確かに、あの宇宙論の著者自身もそう述べている。しかしながら、「循環的なもの」の中に「非循環的なもの」の存することが魂の回転運動の特徴である、と言わなければならない。先程の音階理論の話に関係するが、近代に成立した「平均率」では1オクターヴを7倍した音と、5度を12倍した音は同じ音高になる。それに対して、「ピュタゴラス音律」では完全5度（ $\langle 3 : 2 \rangle$ ）を12倍した音（ $\frac{3}{2}$ ）¹²とオクターヴ（ $\langle 2 : 1 \rangle$ ）を7倍した音（2）⁷は同じ音高にはならず差が生ずる。これがいわゆる「ピュタゴラス・コンマ」Pythagoras commaということになる。尤も、あの宇宙論では「2倍」の系列と「3倍」の系列はどちらも3乗止りなのでこの問題は絡んでこないがね。

アイヌーシュ 分かりました。宇宙の魂の回転運動が天球と惑星の回転運動に相当するということは理解できます。でも、そうすると宇宙の魂と同じ材料から類比的に作られた人間の魂の回転運動とは一体何になるのですか。人間の身体で循環的な運動と言え、息を吐いたり

吸ったり呼吸作用とか、体内における血液の循環というようなことは思い浮かびますが、目に見えないはずの魂の回転運動が何なのか、皆目見当も付きません。

オクセクナルフ よく気が付いた。まさしくそこなんだよ、第一の問題点は。メモしておき給え。「人間の魂の回転運動とは何か」。1年間掛けてまずこの問題について考えなさい。いますぐ分からなくても一向に構わない。第二の問題点に移ろう。それは魂の構成原理としての音律に関わる問題だ。この宇宙の魂の構成に関連して用いられた数比は全部で何種類あるか。

アイヌーシュ 第一段階の分割では「2倍」の系列の〈2:1〉、「3倍」の系列の〈3:1〉、第二段階の分割では「2倍」の系列の2つの中項が〈3:2〉と〈4:3〉、「3倍」の系列の2つの中項が〈2:1〉と〈3:2〉、第三段階の分割では〈9:8〉と〈256:243〉ですから、整理すると〈3:1〉、〈2:1〉、〈3:2〉、〈4:3〉、〈9:8〉、〈256:243〉の6つになります。

オクセクナルフ それらの数比のうち、〈3:1〉は〈2:1〉と〈3:2〉の積に還元される。従って、〈2:1〉、〈3:2〉、〈4:3〉、〈9:8〉、〈256:243〉の5種類あることになる。最後の比は単純な数比ではないが、他の比は一般化される特徴を具えていないだろうか。

アイヌーシュ どの比も後項より前項の方が「1」だけ多くなっています。ですから、〈(n+1):n〉と一般化できると思います。

オクセクナルフ よろしい。但し、先程〈3:1〉を〈2:1〉と〈3:2〉の積に還元したが、元々「2倍」の系列と「3倍」の系列があったのだから、両者の系列は一般化するなら「正の整数倍」ということになるので〈n:1〉と表わすことができよう。そうすると、最終段階の余った部分(〈256:243〉)を除いて、魂の分割では〈n:1〉と〈(n+1):n〉の2種類の比が用いられていると看做することができる。前者は古代ギリシアの数学では「ポラプラシオ

ス」(pollaplasios [logos]「整数倍比」)、後者は「エピモリオス」(epimorios「部分付加数比」)と呼ばれていたものだ。もし最終段階の余った部分としての〈256:243〉をも「部分付加数比」とすることができたら、この音階構成法を完全な「公理体系」に導くことが可能になる筈だ。

アイヌーシュ 「公理体系」なんて数学の話のようですが。

オクセクナルフ そうだね。つまり「整数倍比」(〈n:1〉)としての〈2:1〉をいわば公理として据え置き、完全5度(〈3:2〉)との差を求めることによって完全4度(〈4:3〉)を得、さらにこの完全4度を3つの〈(n+1):n〉に分割するという意味で、「部分付加数比」を派生規則とする極めて単純で数的に美しい体系によって音階が生み出されることになる。

アイヌーシュ ふーん。本当にそんなことが可能になるんですか。

オクセクナルフ なるんだよ、それがね、アイヌーシュ君。先程「ピュタゴラス・コンマ」の話のところで登場した「純正律」なるものがそれなんだ。〈3:2〉と〈4:3〉よりあとの「部分付加数比」を見てみよう。簡単な計算だが、〈4:3〉の次は。

アイヌーシュ 〈5:4〉です。

オクセクナルフ 〈5:4〉は「純正律」では「長3度」の構成比だ。その次は。

アイヌーシュ 〈6:5〉です。

オクセクナルフ 〈6:5〉は同じく「短3度」の構成比だ。その次は。

アイヌーシュ 〈7:6〉です。

オクセクナルフ この比は「部分付加数比」であるにもかかわらず、「純正律」では音程の構成比としては歓迎されない。何故なら、素数「7」が含まれているからだ。このことはいわゆる「自然倍音系列」と照らし合わせてみるとより明らかになるのだが、いまは立ち入らないことにしよう。〈7:6〉の次は。

アイヌーシュ 〈8:7〉です。

オクセクナルフ この比もまた素数「7」を

含んでいるが故に、歓迎されない。その次は。

アイヌーシュ 〈9 : 8〉です。

オクセクナルフ この比は。

アイヌーシュ 既に議論した「ピュタゴラス音律」における全音です。

オクセクナルフ よろしい。この全音は「純正律」では「大全音」と呼ばれて用いられているものだ。

アイヌーシュ 「大全音」なるものがあるのなら、「小全音」もあるのですか。

オクセクナルフ その通り。〈9 : 8〉の次は。

アイヌーシュ 〈10 : 9〉です。

オクセクナルフ この比がまさしく「純正律」で「小全音」と呼ばれる音程を構成する。ここで検算を試みよう。完全4度(〈4 : 3〉)から長3度(〈5 : 4〉)を取り去った後に残るのは。

アイヌーシュ 音程の差は商を求めればよいのですから、 $\frac{4}{3} \div \frac{5}{4} = \frac{16}{15}$ 、即ち〈16 : 15〉になります。

オクセクナルフ その比は。

アイヌーシュ やはり「部分付加数比」です。

オクセクナルフ 「ピュタゴラス音律」のように完全4度を2つの全音(〈9 : 8〉)で分割しないで、「大全音」と「小全音」の2種類の全音で分割するとどうなるかね。

アイヌーシュ 「大全音」(〈9 : 8〉)と「小全音」(〈10 : 9〉)の和は $\frac{9}{8} \times \frac{10}{9} = \frac{5}{4}$ 、即ち〈 $\frac{5}{4}$ 〉となり、これは長3度の構成比になります。

オクセクナルフ よろしい。すると、最小の「整数倍比」としての〈2 : 1〉をいわば公理として用い、あとは「部分付加数比」としての完全5度(〈3 : 2〉)、完全4度(〈4 : 3〉)、「大全音」(〈9 : 8〉)、「小全音」(〈10 : 9〉)、「半音」(〈16 : 15〉)を順次使用することにより、「純正律」の音階が構成される。「ピュタゴラス音律」の半音(〈256 : 243〉)と「純正律」の半音(〈16 : 15〉)とを比べたら、どちらがより単純な整数比かは明らかだね。

アイヌーシュ 言うまでもなく「純正律」の方です。

オクセクナルフ 実に神秘的なことなのだが、より単純な整数比によって構成される音程ほどより響和するという音響学的な法則が存する。基本的原理としての〈2 : 1〉から出発しすべて「部分付加数比」による分割を通じて音階を構成する方法は、数的な美しさのみならず、響きの美しさによっても卓越性を有すると言わなければならない。尤も、このように言う「純正律」万能のように聞こえるかもしれないが、音楽史的に見れば「転調」の問題があるために、「純正律」は「中全音律」を経て近代では「平均率」にとって替わられてしまったのだ。しかしながら、ここでは転調の問題は度外視してよい。何故なら、我々にとって重要なのは楽曲としての音楽ではなくて、響きそのものだからだ。

次に、その話をするにしよう。……ほら、部屋の隅に青銅製の鐘が吊るしてあるだろう。あの鐘を1回撞いてごらん。

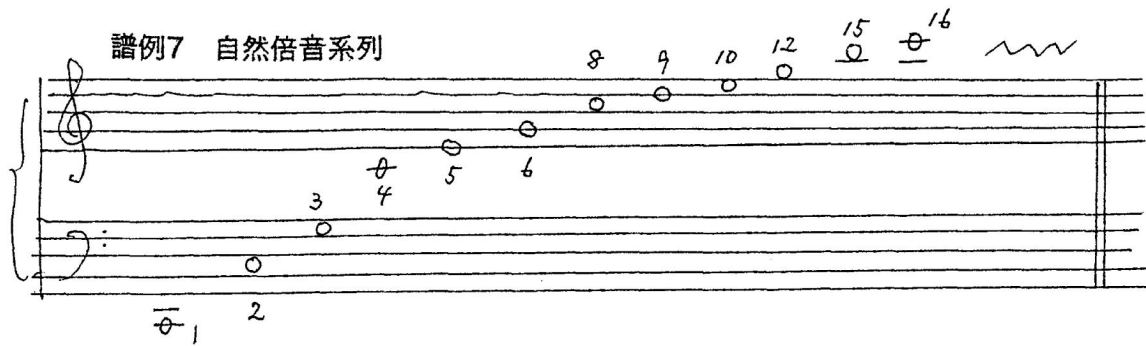
アイヌーシュ はい。……とても長く余韻が続いています。

オクセクナルフ 鐘は1つだけど、いろいろな高さの音が共鳴しているのが分かるね。

アイヌーシュ 1つ1つを聴き分けるのはちょっと難しいかも知れませんが、共鳴している音同士がさらにまた共鳴し合っているようです。

オクセクナルフ これがいわゆる「倍音」、厳密に言えば「自然倍音」*supersoni naturales*と呼ばれるものだ。あの壁に貼ってある図表と五線譜をごらん(譜例7)。

真中の基音「1」を中心に上方へ振動数の比で「2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 12, 15, 16」の倍音が、下方にも「2, 4, 8, 16」位までの倍音が理論的には発生可能だ。実際には、パイプオルガンの低音の太いパイプのようなものを用いても2オクターヴ位が限度で、これらの下方倍音は「結合音」*soni combinationis*と呼



ばれる。右側のはこの関係を理解し易いよう五線譜に表したものだ。先程の宇宙の魂の第二段階の分割を整理したもの（譜例4）と見比べると、どうかね。「1」はどの音か。

アイヌーシュ 一番下の「ut」の音です。

オクセクナルフ 「2」は。

アイヌーシュ オクターヴ上の「ut」の音です。

オクセクナルフ 「それじゃ、「3」以上の音はどうなるかな。

アイヌーシュ 「3」は「2」の完全5度上の「sol」, 「4」は「2」のオクターヴ上の「ut」, 「5」はその長3度上の「mi」, 「6」は「3」のオクターヴ上の「sol」, 「8」は「4」のオクターヴ上の「ut」, 「9」はその全音上の「re」, 「10」は「5」のオクターヴ上の「mi」, 「12」は「6」のオクターヴ上の「sol」, 「15」はその長3度上の「si」, 「16」は「8」のオクターヴ上の「ut」になります。

オクセクナルフ よろしい。すると、「純正律」で用いられる全ての音程は、この「自然倍音系列」に含まれていることが理解できるね。

アイヌーシュ なーる程。それが「純正律」の方が数比として美しいばかりでなく、「ピュタゴラス音律」よりも響きが美しい理由なのですか。

オクセクナルフ まさしくその通り。「純正律」と比べると「ピュタゴラス音律」の〈256:243〉という半音は。

アイヌーシュ いかにも不恰好です。

オクセクナルフ 勿論、「純正律」でも例えば

短6度は〈8:5〉, 長6度は〈5:3〉, 短7度は〈16:9〉, 長7度は〈15:8〉となり「部分付加数比」にはならない。しかしながら、少なくとも音階の構成に用いられる音程はすべて「部分付加数比」であり、且つすべて「自然倍音系列」に含まれている音からなるという大きな特徴がある。

アイヌーシュ 「自然倍音系列」には「7」とか「11」とか, 「13」や「14」が含まれていないのは何故ですか。

オクセクナルフ よいところに気が付いた。

「自然倍音系列」にそれらに相当する音が含まれていない訳ではなくて、含まれていることは含まれているのだが、五線譜上に書き表すことが難しい、つまり音階に含まれる音程としてはなじまないからだ。「14」は「7」の2倍だから除外するとして、「7」, 「11」, 「13」のような数は「素数」numeri primiと呼ばれる。「13」の後にはどんな素数があるかね。

アイヌーシュ 「17」, 「19」, 「23」, 「29」, 「31」, 「37」, 「39」, 「41」, 「43」, 「47」……と限りなく出てきます。

オクセクナルフ よろしい。「素数」にはどんな性質があるだろう。

アイヌーシュ 公約数がなく, 「1」とそれ自身でしか割り切れません。

オクセクナルフ その通り。「1」, 「2」, 「3」, 「5」もやはり素数ではあるが、音程として見るなら「1」は同度, 「2」はオクターヴ, 「3」は「オクターヴ+完全5度」, 「5」は「2オクターヴ+長3度」となる。完全5度

($3:2$) は2つの3度、即ち「長3度」($5:4$)と「短3度」($6:5$)に、「長3度」($5:4$)は2つの全音、即ち「大全音」($9:8$)と「小全音」($10:9$)とに分割される。ところが、「短3度」($6:5$)は最早2つの全音には分割され得ず、「大全音」($9:8$)と「半音」($16:15$)とに分割される。従って、 $7:6$ あるいは $8:7$ の音程は短3度($6:5$)よりは狭く、大全音($9:8$)よりは広いという音程になり「純正律」の音階にはなじまない。これが「7」以後の素数に対応する倍音が却けられる理由だ。

アイヌーシュ 分かりました。

オクセクナルフ 部屋の隅に置いてあるあの、「へ」の字形の石を並べて吊りしてある楽器は「編磬」bianqingという古代中国の楽器だ。傍に行って左の支柱に差し込んである木の棒を取り出して、大きい磬から順にゆっくりと静かに打ち鳴らしてごらん。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ そう。柔らかく、静かに。そして響きが完全に消えてから次の、隣の磬を打ち鳴らしてごらん。…そう。………。そうだ。………。どんな感じかね。

アイヌーシュ 1つ1つの響きはとても澄んでいて、石製なのに金属の響きのようにすら聞こえます。そして順々に鳴り響いた音の列がとても清々しく感じられます。うまく言い表わせませんが、これまで僕が親しんで来た音階とはどこか違ってきます。

オクセクナルフ なるほど。これがね、いま

し方話をした「純正律」の音階なのだよ（譜例8）。

アイヌーシュ へーえ。「純正律」の音階はその構成比が数的に美しいばかりでなく、実際の響きまでもがこんなに美しいなんて、全く驚きです。こんなに美しい響きをいつも耳にしていたら、心の状態ばかりか身体の調子までよくなるような気がします。そうそう。そう言えば、おととしの暮、僕がこの学院に来た日、麓の村で農夫のおじいさんに道を尋ねた時、そのおじいさんが「十年位前に肩が痛くなって腕が挙げられなくなってしまった時に、この学院に来て〈へ〉の字形をした石を3時間ばかり打ち鳴らしたら、嘘のように痛みが治ってしまった」と言っていました、**オクセクナルフ** 「へ」の字形の石と言うのはこの楽器のことだったのですね。

オクセクナルフ 確かに。そういうことがあったね。「痛みを直して欲しい」と言ってわしのところに来る老人が結構いるんだ。手と足、腕と脚が形や大きさが違うように、身体の筋肉や骨、内臓にはそれぞれ異なる固有の響きがあり、この響きの振動数はどの人でもほぼ同じだ。身体の痛みはそれぞれの部分に固有の響きが濁ったり、振れたりすることによって惹き起されるので、その人が痛みを感じる部分の固有の振動数と類比的な関係にある響きを、聴覚を通して間接的に、あるいは腕から身体に直接伝えてやれば、濁ったり、歪んだりしている振動数を本来の振動数に回復させ、痛みを取り除くことができる、と言うのがわしの医療理論だ。

アイヌーシュ へーえ。音の響きにそんな力

譜例8 純正律

The musical notation shows a treble clef staff with a series of notes. The notes are labeled with ratios: (4), $\frac{9}{8}$, $\frac{10}{9}$, $\frac{16}{15}$, $\frac{9}{8}$, $\frac{10}{9}$, $\frac{16}{15}$. A large bracket labeled (8) spans the last three notes ($\frac{9}{8}$, $\frac{10}{9}$, $\frac{16}{15}$).

があるなんて思いも寄りませんでした。痛みを治すのにどの音が合っているか、ということがどうして分かるんですか。痛みそのものは見たり聞いたりすることはできないから、難しい筈だと思いますが。

オクセクナルフ 1オクターヴ中の音を一通り鳴らしてみても、その人が一番「快い」と感じる音を用いればよい。まことに簡単なことだが。それはそれでよろしい。今日はついでにもう一つ面白いものを聞かせてあげよう。部屋の中央の台の上に置いてある水晶でできた鉢を、フェルトで巻いてある棒で縁を擦るようにして鳴らしてごらん。

アイヌーシュ はい。……。こんな感じでよいでしょうか。

オクセクナルフ う、うむ。もう少し、心持ち強めに……。そう、その位の強さで…。ほら、何か聞こえるだろう。

アイヌーシュ 何だか人が唸っているような響きがして来ました。それに、非常に高い倍音が沢山かすかに聞こえます。

オクセクナルフ これはね、「歌う鉢」*vas canens*と呼ばれる不思議な楽器なんだ。「楽器」とは言っても音楽に使うのではなくて。人間の心の不響和を治すのにとっても効力がある。

アイヌーシュ 「心の不響和」と言いますと。いわゆる精神疾患のことですか。

オクセクナルフ いや、そうではない。いまし方、身体の痛みとその治療について話をした。身体の痛みが長期間続くとそれが心の不響和を惹き起すことがあるし、貧困、人間関係の不和、孤独、絶望、病気、死への恐れ…と心の不響和を惹き起す原因は色々ある。尤も、「死」と言っても、この辺の人たちは老人になると歳を重ねるにつれて、自分が大体いつ頃死ぬか分かるようになるものだから、たとい不治の病にかかったために自然死を迎えることができなかったとしても、悲観したり絶望したりすることはないがね。

アイヌーシュ 自分がいつ頃死ぬか、という

ことが自分で分かるなんて本当ですか。

オクセクナルフ 本当だとも。戦争や自然災害、不慮の事故で死ぬような場合は、その限りではないがね。

アイヌーシュ ふーん。信じられません。

オクセクナルフ 話を続けよう。いま述べたような何らかの原因によって不響和の状態に陥った心に響和を取り戻させる力を、この「歌う鉢」は持っているのだ。

アイヌーシュ このクリスタル製の鉢は「物的なもの」ですから、打ったり強く擦ったりすることによって響きを発するのは当然です。でも、心は「物的なもの」ではありませんから、響きを発したりはしないと思うのですが。

オクセクナルフ 確かに、君の言う通りだ。それじゃ君に聞くけれど、「心」とは一体何だね。

アイヌーシュ 身体と共に人間を構成する「非物的なもの」で且つ「目に見えないもの」です。

オクセクナルフ わっはっはっはっはっ。それじゃ、あの宇宙論の作者と同じじゃないか。あの哲学者はね、「靈魂不滅」の思想を本気で信じていたんだよ。だから、あんな奇妙な宇宙論を拵え上げたのだ。

アイヌーシュ 「靈魂不滅」の思想という、人間が死ぬと身体は焼かれたり腐敗してなくなってしまうのに対して、魂の方は消滅しないで別の世界（他界）へ行ったり、他の人間や生きものに移り入って生まれ変わる、というあの考え方ですか。

オクセクナルフ その通り。厳密に言えば、他の人間や生きものに移り入って生まれ変わるという考え方は、「靈魂不滅」の思想の一種に違いないが、むしろ「魂の輪廻転生」*metempsychōsis*と呼ばれるのが相応しいだろう。

アイヌーシュ それじゃ、オクセクナルフ先生は「心」をどのように定義するのですか。

オクセクナルフ 「心」が「非物的なもの」で且つ「目に見えないもの」である、ということはそれはそれで正しい。だが、ここにわ

しのこの身体があるように、どこか身体のうち
に「心」なるものがある訳ではない。何故なら、
わしの意味での〈こころ〉とは「身体の〈はた
らき〉」に他ならないからだ。身体の方は「非物
体的なもの」で且つ「目に見えないもの」で
あるのに対して、〈はたらき〉は少なくとも「物
体的なもの」ではない。

アイヌーシュ では、〈はたらき〉とは何を意
味するのですか。

オクセクナルフ 「身体が現に機能している
こと」を意味する。例えば、鳥が現に空を飛ん
でいることが「鳥の身体」の〈はたらき〉であ
り、花が現に咲いていることが「植物の身体」
の〈はたらき〉だ。

アイヌーシュ 少し分かってきました。脳の
ような身体の部分、あるいはあの宇宙論のよう
に身体全体に「非物的なもの」としての
「心」なるものが存している訳ではないのです
ね。

オクセクナルフ まさしくその通り。身体が
〈はたらいている〉からこそ、我々はものが見
えたり聞こえたりするし、喜んだり悲しんだり
もするし、ものごとを認識したり思考したりす
るのだ。これら感覚、感情、表象、「快苦」の欲
求・忌避、認識や思考と行った作用は普通「心」
の〈はたらき〉と看做されているが、「心」なる
ものがあってそれが働いているのではない。そ
れらの作用は身体が現に〈はたらいている〉こ
との証であり、言い換えれば、〈こころ〉の〈ひ
びき〉なのだ。この〈ひびき〉は既に言及した
ような原因によって不響和の状態に陥る。「歌う
鉢」には〈こころ〉の〈ひびき〉を響和の状態
へと導き、「生きる喜び」を取り戻してやる不思
議な力が備わっている。もう一度、「歌う鉢」を
その棒で少し強めに擦ってごらん。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ 話を続けよう。さっき君は
「唸り声のような響き」と言ったが、するとこ
れは「歌」と言えるだろうか。

アイヌーシュ いいえ、「歌」とは言えませ

ん。やっぱり、「唸り」としか言いようがありま
せん。

オクセクナルフ よろしい。ところで、話は
変わるが、あの宇宙論の最後の方で「宇宙の植
物」（ギリシア語では「ピュトン・ウーラニコ
ン」phyton ūranikonと言うのだが）という言
葉が出てきたのを覚えているかい。

アイヌーシュ はい、覚えています。変わった
表現だなとは思いましたが、何のことなのか
よく理解できませんでした。

オクセクナルフ うむ。それはね、人間を植
物に喩えているんだよ。但し、普通の植物とは
意味が違うのだ。普通の植物はどこから水分や
養分を取り入れているかね。

アイヌーシュ 根からです。葉でも日光と二
酸化炭素によって光合成をし養分を得ていま
すが。

オクセクナルフ その意味で植物にとって根
は重要な部分だ。問題の「宇宙の植物」として
の人間においては頭が普通の植物の根に相当す
る。

アイヌーシュ 人間の頭が植物の根…。

オクセクナルフ わっはっはっはっはっ。面
食らったかね。以前君は、「生きもの」としての
宇宙の魂と人間の魂の間に類似関係が成立する
ことにより、人間が「宇宙のハーモニア」を知
覚する能力を獲得したことを確認したね。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ 天体の観測と音階の研究を
通じて「宇宙のハーモニア」を認識することを
いわば心の糧とすべきであるという意味で、人
間は「宇宙の植物」と規定されているのだ。し
かし、これでは全くの頭デッカチになってしまう。
あの宇宙論では人間の身体が最初に作られ
た時、「生きものとしての宇宙」の球状の身体に
似せて、人間の身体（実は頭部）が真ん丸に作
られたという話は覚えているね。

アイヌーシュ はい。でも、ゴロゴロ転がっ
てしまうので、胴体や手足がその「乗り物」と
して付けられたのでした。

オクセクナルフ よろしい。しかしながら、この荒唐無稽な考えにも傾聴すべき点がある。それは、人間の生き方は植物の在り方を手本とすべきであると言う意味で、人間は「ある種の植物」に喩えられるからだ。だが、「ある種の植物」としての人間の根は頭部ではない。そこで、「人間はどこから何を〈こころ〉の養分として取り入れるべきか」が問われなければならない。これは重大な問題だから、いずれ君に宿題として課すことになろう。

今日君に宿題として出した問題、即ち「人間の魂の回転運動とは何か」について、また1年掛けてよくよく考えておきなさい。そして考えたことと結論をまとめて文章にしたものをわしに提出してくれ給え。難しい問題だから、一つ参考書を君に与えておこう。それは先程「後で話をする」とわしが言った書物なのだが。但し、参考書とは言っても、答えが示されてあるという類のものではない。それを読み解くことが今回の課題について考える重要な手掛りとなる、という意味での参考書だ。ちょっと待っていてくれ給え。わしの部屋からその本を持って来るから。

アイヌーシュ はい。

オクセクナルフ 待たせてすまん。これがその参考書だよ。この本を見せるのは君で2人目だ。

アイヌーシュ 最初はエニユソルフオスさんということですか。

オクセクナルフ その通り。この書物には『響無窮』Xiang-wu-qiongという題が付けられているが、この題は著者自身によって付けられたものかどうかは不明だ。内容から推定するといまから2400年位前に、つまりあの、「不老不死の仙薬」を求めた秦の始皇帝よりも少し前に中国で、あるいは西域で書かれたらしい。著者は無名氏で一切不明だが、ギリシア語からラテン語を読解できた中国人、もしくは中国語の文章を

書けた西域人によって書かれたのは確かだ。この書物の存在は世には全く知られていない。竹簡に記されていたものを後世の人が解読して手稿本の形にしごく限られた人たちによって伝承されたようだ。わしが若い頃カテクノポリスに留学していた時に、さる古籍商から買い入れたものだ。君に貸してあげるが、とても貴重な書物でわしが大切にしているものなので、まず自分自身で全部書き写してからそれを繰り返し読んで勉強するようにしてもらいたい。

内容を簡単に説明しておこう。全部で五章からなっている。「解尊第一」は、あの宇宙論が書かれた意図が何であるか、またそのような意図にはどのような問題があるか、について論じている。ここには今回の課題、即ち「人間の魂の回転運動とは何か」について考えるための手掛りが含まれている。「音律第二」は音律と響きの問題について論じている。音律は人間が発見した「音の秩序」であり、響きは物理現象であるが、物理現象としての響きが何故人間の心に影響を及ぼすのか、ということにまで論じ及んでいる。だから、この章をも君は読んでおく必要がある。「範木第三」はこの世界の成り立ちに付いて論じたもので、ここでは二世界説に基づくあの宇宙論とは全く異なる世界観が述べられており、章の名前が暗示している通り「ある種の植物」としての人間の在り方についても論じ及んでいる。従って、「人間はどこから何を〈こころ〉の養分として取り入れるべきか」という問いに対する答えを見出すためには、この章を読み解くことが不可欠になる。相当に骨が折れると思うがね。「心耕第四」はこの世界観に依拠する「生命の〈あるべき姿〉」、といっても「理想の姿」という意味ではなくて「実践としての生」の問題が論じられている。この章辺りから相当に難解になって行くがね。最後の章「海蔵第五」に至っては普通の読み方をしては到底理解不可能な代物で、わしも相当苦労したが、この章の御蔭で「自己のうちなる海」の発見をこの学院の建学精神として掲げることができたとい

う、曰く因縁付きの章だ。

5章を全部読んでみるみないは君の自由だ。別に急ぎはしないが、先程も言った通り貴重な書物だから呉々も大事に扱って欲しい。書き写し終わって、誤字・脱字がないかを点検したら私に返してくれ給え。

アイヌーシュ 仰ることは分かりました。一つ質問があります。この学院の建学精神は「聞こえない音楽」が聞こえるようになることと、「自己のうちなる海」を発見することでした。いまの説明によれば、この書物の最後の章には後者のための手掛りが含まれているようですが、この書物には前者のために役立つことは書かれてはいないのですか。

オクセクナルフ そのことならば、こう答えたらよかろう。「聞こえない音楽」については主観的に論じた章はないが、特に「範木第三」と「心耕第四」を読み解くことを通じて「聞こえない音楽」の存在が理解できるようになるよう書かれている、と。「フェスティーナ・レンテ（ゆっくり急げ）」、「ムルタ・フィーウント（多くのことがなされる）」。当分の間まず第1章と第2章をよく理解した上で、第3章を読み解く

ことに専念し給え。

アイヌーシュ 分かりました。

オクセクナルフ 今日は春分を過ぎて三日目だったね。だから、1年先というのは来年の春分の頃ということになる。その頃までには宿題に対する回答を整理し、文章として纏めておきなさい。

アイヌーシュ はい、どこまで理解できるか心もとありませんが精一杯努力してみます。今日は僕のために何時間も割いて頂き、有難うございました。

オクセクナルフ いや、そのことならば礼には及ばん。ここは真理の探究と実践のための学院であり、生徒を導くのはわしの務めなのだから。

アイヌーシュ では、この手稿本を拝借します。

オクセクナルフ うむ。「フェスティーナ・レンテ」、「ムルタ・フィーウント」。

(第3章終り第Ⅱ部続く)

2006. 9. 21

愛好樂神學院

第二部 音樂少年埃奴虛Ainuusy的修煉

第三章（摘要）

三箇月在那箇學院作為候補生工作的埃奴虛正式得到入學許可。為了鑽研〈不可聽的音樂 *musica inaudibilis*〉，他開始學習柏拉圖〈尊子 TIMAIOS〉的拉丁文譯，同時接受由師哥艾女囊兒夥 Enysorphos 練習發聲的指導。一年之後，

通過圍繞宇宙靈魂的構成跟院長沃色納爾夫 Oxecnarf 問答，他理解〈宇宙之和諧 *harmonia mundi*〉和認識到一箇難題：〈人的靈魂的回轉運動〉就是什麼意思？因此院長幫他思索貸出以〈響無窮〉為題的無名氏所著的文章。